

2. りんどう

・殺菌剤

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
M4	オーソサイド水和剤 80	散布	-	8回以内	
M5	ダコニール1000	散布	-	6回以内	(褐斑病は参考農薬)
39	ピリカット乳剤	散布	発病初期	6回以内	
M7	ペフラン液剤 25	散布	-	8回以内	(花腐菌核病は参考農薬)

・殺菌剤 (参考農薬)

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
10+1	ゲッター水和剤	散布	-	5回以内	花き類・観葉植物(ひまわり、ゼラニウムを除く)
11	ストロビーフロアブル	散布	発病初期	3回以内	
M3	(チウラム) チオノックフロアブル トレノックスフロアブル	散布	発病初期	6回以内	
9	フルピカフロアブル	散布	発病初期	5回以内	
19	ポリオキシシリンAL水溶剤	散布	発病初期	8回以内	

・殺虫剤

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
10	ニッソラン水和剤	散布	-	2回以内	花き類・観葉植物
21	ピラニカEW	散布	発生初期	1回	花き類・観葉植物(カーネーション、きくを除く)

・殺虫剤 (参考農薬)

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
3	アディオフロアブル	散布	-	6回以内	
4	アドマイヤーフロアブル	散布	発生初期	5回以内	花き類・観葉植物(きくを除く)
1	オルトラン水和剤	散布	発生初期	5回以内	花き類・観葉植物
	オルトラン粒剤	株元散布	発生初期	5回以内	花き類・観葉植物(きく、宿根スターチス、カーネーション、アリウムたであいを除く)
1	スミチオン乳剤	散布	発生初期	6回以内	
15	ノーモルト乳剤	散布	発生初期	2回以内	

注1) 使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、この他に薬剤に含まれる成分毎に、総使用回数が決められているので、農薬ラベル等を確認してそれを超えないように注意する。

注2) 薬剤抵抗性の出現を防ぐため、「FRACコード」や「IRACコード」を参考にしながら他系統剤とのローテーション使用を心掛ける(「薬剤抵抗性管理」参照)。

注3) 農薬登録上の作物名が標記の作物名と異なる場合、備考欄に記載した。

病害虫名 (F : 菌類病、B : 細菌病、V : ウイルス病、O : その他の病原体)

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
葉 枯 病 (F)	5月～9月	1. 多肥栽培しない。 2. 茎葉を適切に整理し、過繁茂にしない。 3. オーツサイド水和剤80の600倍液、ダコニール1000の1,000倍液、ベフラン液剤25の1,500倍液、ピリカット乳剤2,000倍液のいずれかを7日おきに散布する。 [参考農薬] 1. ポリオキシシンAL水溶剤2,000～2,500倍液を散布する。	1. 初発を確認したら、速やかに薬剤防除を開始する。 2. ベフランは蚕毒に注意する。
褐色根腐病 (F)	は 種 前 植 付 前	1. 発病ほ場では土壌消毒を徹底する。 2. 連作を避ける。	1. 本病は土壌伝染性の難防除病害である。
灰色かび病 (F)	5月～9月	1. 発病葉は伝染源になるので、見つけ次第除去する。 2. 茎葉を適切に整理し、風通しを良くする。 3. ほ場衛生の向上に取り組む。 [参考農薬] 1. ゲッター水和剤1,000倍液、フルピカフロアブル2,000～3,000倍液のいずれかを散布する。	1. 下位葉に小黒点が見られない褐色枯れ症状が本病の特徴である。本症状が見られたら薬剤防除を開始する。 2. 薬剤耐性菌の出現を避けるため、同一薬剤を過度に連用しない。
花腐菌核病 (F)	5月～9月	1. 発病株は見つけ次第抜き取り、ほ場外に埋却する。 2. 茎葉を適切に整理し、風通しを良くする。 3. ほ場衛生の向上に取り組む。 [参考農薬] 1. ベフラン液剤25の1,500倍液を散布する。	1. ベフランは蚕毒に注意する。
黒 斑 病 (F)	5月～9月	1. 発病株は見つけ次第抜き取り、ほ場外に埋却する。 2. 茎葉を適切に整理し、風通しを良くする。 3. ほ場衛生の向上に取り組む。 [参考農薬] 1. フルピカフロアブル、ストロビーフロアブルの2,000倍液のいずれかを散布する。	1. 葉の中央部分から輪紋状の病斑が形成されるのが特徴である。本症状が見られたら速やかに薬剤防除を開始する。 2. 薬剤耐性菌の出現を避けるため、同一薬剤を過度に連用しない。 3. QoI剤に関する注意事項(56.野菜類の総括注意)参照。
褐 斑 病 (F)	5月～9月	1. 発病葉は伝染源になるので、見つけ次第除去する。 [参考農薬] 1. ダコニール1000の1,000倍液、又はストロビーフロアブル2,000倍液を散布する。	1. 初発を確認したら、速やかに薬剤防除を開始する。 2. 薬剤耐性菌の出現を避けるため、同一薬剤を過度に連用しない。 3. QoI剤に関する注意事項(56.野菜類の総括注意)参照。

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
炭 疽 病 (F)	生 育 期 間	1. 敷わらやポリマルチ等により、土壌の跳ね返りを防ぐ。 2. 間引きを徹底し、仕立本数を制限するなど風通しを良くする。 3. 発病部位、発病株は見つけ次第ほ場外に持ち出し、処分する。 [参考農薬] 1. チウラム（チオノック、トレノックス）フロアブル 500 倍液を散布する。	1. 可能な場合は、伝染源の可能性が疑われるほ場周辺のニセアカシアを伐採する。 2. チウラム（チオノック、トレノックス）フロアブルは蚕毒に注意する。 3. チウラム（チオノック、トレノックス）フロアブルは、葉に汚れを生じることがある。
リンドウ ホソハマキ	4月～10月	[参考農薬] 1. ノーモルト乳剤 1,000 倍液、又はアディオフロアブル 1,500 倍液を散布する。	1. 散布は、10 日おきに下葉の裏まで薬液がかかるようにする。 2. 5月下旬～6月上旬、7月下旬～8月上旬、8月下旬～9月中旬は発生が多くなるので、散布間隔を短縮する。 3. アディオンは蚕毒及び魚毒に、ノーモルトは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。
ハダニ類	生 育 期 間	1. ニッソラン水和剤、又はピラニカEWの 2,000 倍液を散布する。	1. 同一剤を連用しない。 2. 薬剤が葉裏まで十分かかるよう散布する。 3. ピラニカは魚毒に特に注意する（特別指導事項参照）。
ヒラズハナ アザミウマ	生 育 期 間	[参考農薬] 1. スミチオン乳剤 1,000 倍液、又はアディオフロアブル 1,500 倍液を散布する。	1. アディオンは蚕毒及び魚毒に特に注意する（特別指導事項参照）。
アザミウマ類	生 育 期 間	[参考農薬] 1. オルトラン粒剤を 10a 当り 3～6 kg 株元散布する。 2. オルトラン水和剤 1,000 倍液を散布する。	
アブラムシ類	生 育 期 間	[参考農薬] 1. アドマイヤーフロアブル 2,000 倍液を散布する。	1. アドマイヤーは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。
コウモリガ	生 育 期 間	1. 被害部を発見次第、食入幼虫を捕殺する。	